葬送儀礼の意味

山　下　恵　子
Keiko YAMASITA

1．はじめに

高齢化社会を迎え、個人の生活の質（ＱＯＬ）が盛んに言われるようになった。住み慣れた土地で慣れ親しんだ家で一緒に生活してきた家族に囲まれて、人生の最後を在宅で過ごしたいという人たちが増えてきている。在宅で人生の最後を迎えれば当然その後に続く死後の儀式を家庭で行わなければならない。在宅ケアでは、医師や訪問看護婦やホームヘルパーなど多少なりとも儀式を心得た人たちがかかわることになるが、それぞれの儀式の意味を理解している人は少ないように思う。われわれ教員も介護技術の中には終末期の介護、臨終時の介護などを学生に教授しなければならない。しかし、テキストをみても、方法は記載されているが、その意味まではなく学生に「どうしてこんなことするのか？」と問われることもある。そこで、文献を中心にそれぞれの儀式の意味を調べ、住職の話なども含めてまとめてみた。

2．葬送儀礼と日本人の死生観

1）日本人の宗教観と死生観

多くの日本人は「私は宗教を持っていない」と答える。ところがその同じ日本人に「あなたのお宅の宗派は何ですか」とたずねると「家は何々宗です」と答え、さらに「でも私は仏教徒ではありませんが」と付け加える。「家」の宗教はあるが、個人としては宗教を持っていない。しかし、日本人は信仰を持っていないといいながら、多くの日本人は何かというとさまざまな「かみ様」「ほとけ様」にお参りをしている。また、古いしきたりを受け継いでいる家庭では、家の中にはいくつものかみ様やほとけ様をまつっているのが普通である。「家」は、家族とは異なり、家業と家産を持つ生活の拠点であり、社会的活動の一つの単位である。また、「家」の永続が「家」を構成する人々の願いであった。子孫に相続させる財産があっても、またなくても、それとは無関係に、「家」の永続を願い、家族が死ぬと、仏教式の葬送を繰り返して、死者が成仏してご先祖になり、永遠に「家」のメンバーであり続けると同時に「家」を守るものとして期待していた。

現在では、葬式など冠婚葬祭は、自宅で行うことは少なくなってきた。しかしひと昔前ま

では、隣組などと呼ばれる近所の人々が集まり、そこの部落独特の風習でとり行われることが多かった。そのため、多くの儀礼にはその地域での風習が色濃く出てくる場合が多い。また、日本人の場合、死者に対して愛惜の念を抱き、また同時に腐敗していく死体に対する恐怖・嫌悪感という矛盾した感情を抱く。そのあらわれがこれから述べる様々な儀式のいわれに表現されている。

2）葬送儀礼とは

死者を葬る一連の儀礼は葬送儀礼、又は単に儀礼や葬儀ともよんでいる。ごく狭い意味では死体の処理とそれに伴う儀礼を言う。死の儀礼は、死体処理ですべて終わるものではない。死体の処理とともに死者と新たな関係を樹立する儀礼ともなっている。広い意味においては、死に対する一連の行為としての葬制に付随する儀礼といえる。ある民俗学者は、葬送儀礼が死者を生者の世界から分離し、新しい世界に再生せしめるための通過儀礼であることを指摘している。死霊崇拝盛んな民族においては、葬送儀礼は深い意味を持っている。

3．臨終からの死者に対する儀式

1）末期の水（死に水）

死にゆく者に対して、家族が枕元に寄って順番にその口許を水で潤すこと。新しい筆か箸の先に脱脂綿を巻いて糸で縛り、それに水を含ませて、軽く口を湿らせる（脱脂綿のかわりにしきみや菊の葉に水をつけて行うこともある）。死に水を取る順序は、配偶者、子、故人の両親、兄弟姉妹、子の配偶者、孫の順に行う。かつては臨終の間際に行われるものであったが、現在では息を引き取った後に行う。病院で臨終後行うことが多いが、自宅に帰ってきて、布団に安置された直後に行うこともある。家族がそろっていないときには揃うのを待って行うこともある。

本来死者の魂を呼び止めて蘇生を願ったり、この世に魂をとどめておくことを願う儀礼だとされる。親しい人の最後にあたってせめてなにかしてあげたいという遺族の心情が含まれている。

<いわれ>

「末期を悟られた仏陀は弟子の阿難に命じて、口が渇いたので水を持ってきて欲しいと頼んだ。しかし阿難は河の上流で多くの車が通過して、水が濁って汚れているので我慢してくださいといった。しかし仏陀は口の渇きが我慢できず、三度阿難にお願いした。そして『拘孫河は個々から遠くない、清く冷たいので飲みたい。またそこの水を浴びたい』とも言った。その時、雪山に住む鬼神で仏道に篤い者が、鉢に浄水を酌み、これを仏陀に捧げられた」

仏典『長阿含経』

2）神棚封じ

家族の誰かが死亡した場合、死の忌みを嫌う神棚に白い紙を貼って封印すること。古くは、家のものはけがれているので神棚封じは第三者が行うものとされてきたが、最近では、家の者が行うようになった。葬儀や四十九日の忌明けまでとしている。ところによっては仏壇を閉ざすところもある。

<いわれ>

昔から神道では死や出産は汚れとして取り扱い、かつては死者のために喪屋を作り、出産に際しては産屋を設けて隔離した。喪の時には、初詣など神社におまいりに行かないことなども行われている。

3）北枕

故人の頭を北側に向けて安置すること。病院から自宅に遺体を運んできたら、布団に寝かせる。敷布団は一枚、その上にシーツをかけ、掛け布団は一枚にする。住宅事情により北向きにできない場合は、西枕にする。

<いわれ>

釈迦が入滅したときの姿とされ、顔を極楽浄土の方向である西に向けるので、頭は北、足は南になる。沖縄では、古来から遺体を西向きに寝かせる風習がある。

4）枕飾り

死者の枕もとに供えるもの。仏を供養する「華、塗香、水、焼香、飯食、灯明」にちなむ6種類の供養物を置くことから六種供養とも呼ばれる。6種の供養物とは、ローソク立て・香炉・花立（三具足）、浄水、枕飯（一膳飯）、枕団子などである。香炉には一本の線香を立て葬儀が終わるまで絶さずあげる。また、ろうそくも一本立てこれも絶やさず灯し続ける。花立てには、シキミか白い菊をどちらの場合も一本だけ飾る。

守り刀は、邪霊を払うために、枕元か胸元に木刀や刀、現在ではかみそりやはさみなどを刃を足元に向けて置く。

<いわれ>

①香炉（線香）：これは仏の食物を意味し、同時に遺体の臭気を抑えるためともいわれる。絶やさず線香をあげることを「不断香」という。

②蜀台（ろうそく）：ろうそくの光は、三途の川を渡って極楽に行き着くために闇を照らすとされている。もともとは釈迦が涅槃に入る（死ぬ）間際に残した、自らと法を灯にたとえた言葉、「二灯一光」に由来するといわれている。

③花立て：シキミか[注]白い菊を一本のみ立てる。シキミはモクレン科の常緑樹で独特の香りを持つ。その強い香りから香木の代わりとして死臭を清めるために用いられたとされる。また、妖怪を退散させる呪力があるからだとされる。

実際、シキミの実や葉には有毒成分が含まれており、「悪しき実」がシキミの語源という説もある。人の死肉をたべた妖怪がシキミの実を食べてその毒にあたって退治され、以後

シキミのあるところには邪悪なものや悪霊が寄り付かなくなったという伝説も残っている。シキミは大変生命力が強い木で魔よけとして墓などにも植えられている。

④枕団子・枕飯：臨終後直ちに作られる。これは、死者が息を引き取るとすぐに霊場に詣でなくてはならず、そのときにお弁当がないと死出の旅にでられなくなり、成仏できなくなるという言い伝えに基づいている。死者が最初に赴くのは信州では善光寺といわれている。その地方によって伝承は異なる。一般的には６個か７個が多い。６個の場合には、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上の六世界を巡ることにちなんでいる。また、ひとつ増やして７個にするのは六道に迷わす仏の国である極楽に往生できるようにとの願いを込めたものである。

枕飯の米を炊くときは、普段使っているかまどを使わず、燃料も軒下にあるわらなどをたき付にし、葬具を作った木片や物干し竿を燃やすなどとされている。

５）逆さごと

葬儀に関係するものごとでは、通常の逆を行う「逆さごと」というものが行われる。日常では、忌み嫌う習俗と考えられている。

①逆さ屏風：遺体を安置した枕元に屏風をひっくり返して立てる。今日では屏風を持つ家は少ないので葬儀社から借りることも多い。襖を逆さに立ててもよい。しかし、これらの習俗は簡略化しつつある。

②逆さ着物・足袋：経帷子や浴衣などを遺体に掛ける際、着物の襟を足元に裾を顔のほうに掛ける。また、納棺時に足袋を左右逆に履かせる。死者の着物のあわせを「左前」（衣服を着せる人から見て、左身頃が手前になるような着方）にする。

③逆さ水：遺体を清める際（湯灌のとき）、たらいにまず水を注ぎいれ、湯をその後で入れて作った微温湯。逆さ水は、用いた後、陽のあたらぬ場所へ流すのがならわしになっている。

＜いわれ＞

死という異常事態に対処するために、古来から様々な工夫がなされてきた。死者を生者の領域から隔絶させるというものである。また、死者の世界はこの世とは「あべこべ」になっていると考えられ、逆さごとのしきたりが今でも行われていると考えられる。

４．穂高町で体験したの葬送儀礼

穂高町に嫁いで10年近くになる。その10年間に二人の肉親を亡くした。ここでは、いままで調べてきたこと以外の風習がみられた。病院から亡くなった人を家に入れる時から日常とは異なることを行い、故人が身に付けていたものの扱いにまで儀式が及んでいた。各儀式に対してのいわれは、今まで述べてきたものと同様に、亡くなった人を別の世界へ行く人と考えることや魂の成仏などと考えられる。

1）遺体の搬入

亡くなった人を家の中に入れるときは、玄関からではなく縁側など玄関以外の場所から入れる。また、出棺のときも玄関からではなくほかの場所より亡くなった人を送り出す。

2） 今まで着ていた衣服の扱い（北干し）

故人の好んだ衣服などに着替えるが、着ていたものは洗濯を行い物干に干す。このとき、着物の前身ごろを北側に向けて干す。前あきのときもかぶりのときも同様に行う。いわれはよくわからない。ただ日常洗濯物を干すときは着物の前身ごろ（前あき・丸首も）を北にむけて干すことは絶対しない。現在でも、干し方については注意を受けることがある。いわれ、ここでのいわれははっきりとしないが、柳田國男の葬送習俗語彙によると、若狭地方の海岸部部落では、死人の着たものは北干しにするという慣わしがあったようである。ここから全国に広がったとしている。

3）枕飾りの団子

団子は、その家の嫁がつくる。枕団子を作るときは、上新粉（米の粉）をぬるま湯でこねる。そのときも左手でこね、左手で作るとされている。蒸かすことはせず、生団子を奇数の数を供える。

4）納棺

納棺時、荒縄をたすきに掛けて、この儀式を行う。現在では、荒縄では座敷がごみっぽくなることから、白と黒の水引を左肩から右方へたすきに掛け右腕下で結ぶ。納棺後は、焼却する。これは、納棺の前にこれから一番悲しい場面になるので、その前に身を引き締めるためにこの儀式が行われる。これは、死者の上に涙を落とさないためにも行われるといわれている。また、魂（霊）よけの意味もあるという。

棺の上に羽織を上下逆に掛ける。通常と反対のことを行うことからきていると考えられる。

5）死者に涙を落としてはいけない

亡くなった人を前にして、思わず涙がこぼれることはよくあることである。しかし、お参りの際も、納棺の際も死者の上に涙を落とすことはいけないといわれる。これは、涙を落とすと死者があの世にいけなくなるという言い伝えによる。

6）清めの塩と米ぬか

納棺終了時やお墓にいって帰ってきたとき、塩で手を清めその後米ぬかをつけて手を洗う。ぬかは、昔石鹸のかわりに使用されていたその名残りと考えられる。

7）葬送儀礼から感じたこと

肉親において様々な葬送儀礼を体験した。亡くなったばかりは、布団に寝かせ、線香やろうそくの灯を絶やさないように遺体のそばに一晩付き添う。それから納棺し、蓋にくぎ打ちをし出棺する。

一つ一つの儀式が、肉親との別れと新しい関係を作っていくのに大きな役割を果たしてい

く。布団で寝かされていた遺体が棺に入れられ釘を打たれる。だんだんとわれわれの手から離れ、自分たちの世界とは別のところへ行くのだと実感してくる。また、節目節目で行われる多くの儀式が、逆さ事と呼ばれ、この世と反対のことを行うことで亡くなった人が別の世界のものになっていくと感じてくるのではないだろうか。これらの儀式やその後に続く各種の法要を通して遺族が亡くなった人に対しての気持ちを整理していくのに重要な役割を持っているのだと感じた。

5．おわりに

臨終後の死後の処置やそのあとに続く様々な儀式に対しては、日本人の死生観、その土地独特の風習、死に対する考えなどが多く反映される。それぞれの儀式の意味も考えつつ、残された家族の方々が、最後の別れを心を残すことがないように、意向に十分配慮したい。いずれにしても、死後の処置にかかわる者は、死者の魂に礼を尽くし、生前と同じように話しかけ、問いかけをしながら行う。また、やすらかに永眠できるように心をこめ、最後の看取りの場面にかかわりたい。さらに、自宅でこれらの儀式が行われなくなってきている現在、これらの習俗を大事に語り継いでいくことも大切なのではないかと考える。

注）シキミ科の常緑高木。高さ２～15m。３～４月、薄黄白色の花を開く。果実は袋果でおのおの一個の種子がある。精油を含んだ葉は抹香や線香を作るのに利用される。この実は山口県の一部では「おしゃり（仏舎利の意）」と称し、善良な人が死ぬと胸にこの形が残るという。『日本大百科全書　10』より

引用参考文献

1）木内堯央・宮坂宥勝・石田充之・石田瑞麿他　死の一点　その宗教的課題人文書院　1984
2）小口偉一　宗教学　弘文堂入門双書　1983
3）阿満利麿　日本人はなぜ無宗教なのか　ちくま新書　1996
4）立川昭二　日本人の死生観　筑摩書房　1998
5）アルフォンス・デーケン　死への準備教育　第２巻　死を看取る　メヂカルフレンド社　1999
6）アルフォンス・デーケン　死への準備教育　第３巻　死を考える　メヂカルフレンド社　1999
7）一条真也　魂をデザインする葬儀とは何か　国書刊行会　1992
8）芳賀登　　葬儀の歴史＜増補版＞　雄山閣出版　1986
9）井ノ口章次　日本の葬式　筑摩書房　1985

10) 森謙二　墓と葬送の社会史　講談社　1993
11) 葬送文化研究会　葬送文化論　古今書院　1993
12) 柳田國男　葬送習俗語彙　国書刊行会　1977
13) 柳田國男　禁忌習俗集　国書刊行会　1977
14) 倉石あつ子・小松和彦・宮田登　人生儀礼事典　小学館
15) 信濃毎日新聞社　信州の冠婚葬祭　信濃毎日新聞社　2000
16) 信州仏教研究会　信州の仏事　銀河書房　1985
17) 葬送儀礼研究会　お葬式のナゾ　永岡書店
18) 仏教文化研究会　仏事のしきたり　ひかりのくに
19) 赤根祥道　仏教おもしろ雑学　梧桐書院　1999
20) 野々村智剣・仏教文化研究会　門徒もの知り帳　上・下　法蔵館　1999
21) 中西智海　よくわかる仏事の本　新版　浄土真宗　世界文化社　1998
22) 相賀徹夫　日本大百科全書　10　小学館　1986
23) 藤井正雄　葬儀大事典　鎌倉新書　1993
24) 日本赤十字社医療センター看護部　看護スキルシリーズ　死後の処置　ＶＴＲ　インターメディカ
25) 玉木ミヨ子　イラストで見る診る看る　看護基礎学　医学評論社　1999
26) 峰村　淳子・宮崎歌代子・田山友子　イラストで見る診る看る在宅看護　医学評論社　1999
27) 福祉士要請講座編集委員会　介護福祉士養成講座　13　介護技術　中央法規出版　1997
28) 岡崎美智子・小田正枝　看護技術実習ガイド２　在宅看護技術　メヂカルフレンド社　2000
29) 大吉三千子・春日美香・平松則子　看護学生版シリーズ９　写真で見る基礎看護技術　小学館　1997
30) 内藤寿喜子・江木愛子　新版看護学全書13　基礎看護学２　メヂカルフレンド社　1998
31) 薄井担子・小玉香津子　系統看護学講座　専門２　基礎看護学２　医学書院　1991